

地域の支えあい、みんなの居場所づくり

—板橋区内でコミュニティカフェフォーラム開催—

東京都板橋区内のコミュニティカフェの実践者たちが横断的な連絡会を立ち上げ、記念のフォーラムを開催した。同区内にはコミュニティカフェが10か所近くあるが、そのうち高島平団地内の4つのカフェが中心となって連絡会を結成。フォーラムには板橋区役所の幹部職員をはじめ、各地からカフェの関係者など、150人もの参加者が集まつた。



12時50分に主催者を代表して「コミュニティーカフェ・高島平駅」主宰者の村奈嘉義雄さんが開会の挨拶をして始まった。

13時からは6つの区内のコミュニティーカフェの代表者がそれぞれの活動を披露した。高島平団地からは、「コミュニティーカフェ・高島平駅前」「地域リビングPLUS ONE(高島平)」「未来箱」の3事業者。これに、光が丘の「団地の縁側」、東新町2丁目の「たまりば・とうしん」、徳丸1丁目の「コミュニティースペースあゆちゃんち」が登場。

参加者には、各団体の活動内容を紹介したカラーの小冊子「板橋に、こんなにあつた! コミュニティースペース」が配られ、マイ

確かに表題どおり、板橋区内には少なくとも9つのカフェがある。それも、つい最近開設されたところがほとんどだ。2011年11月に「団地の縁側」が開かれたのを皮切りに、12年9月、10月に「コミュニティーカフェ・高島平駅前」と「まちの保健室」が相次ぎ開設。翌13年1月で名乗りを上げ、14年に徳丸と上板橋が続く。

の2、3年で急速に知られるようになるとともに板橋区内で実践者が現れたようだ。それにしても、ひとつつの団地内に4か所もあるというのは極めて珍しい。いずれも、空き店舗の活用であ

クを手にした登壇者の話を聞きながらページを繰っていた。

当日、フォーラムに参加できなかったコミュニティーカフェ3か所がこの冊子に掲載された。大谷口北町の「まちの保健室」と上板橋1丁目の「地域交流カフェ・Ochanomizuお茶の間」「高島平多国籍食堂ハロハログルメ」の3カ所。

高齢社会だからこそ、拡がる特徴あるコミュニティーカフェ

確かに表題どおり、板橋区内には少なくとも9つのカフェがある。それも、つい最近開設されたところがほとんどだ。2011年11月に「団地の縁側」が開かれたのを皮切りに、12年9月、10月に「コミュニティーカフェ・高島平駅前」と「まちの保健室」が相次ぎ開設。翌13年1月で名乗りを上げ、14年に徳丸と上板橋が続く。

コミュニティーカフェの活動がこ

うになるとともに板橋区内で実践者が現れたようだ。それにしても、ひとつつの団地内に4か所もあるというのは珍しい。地域のボランティアさんが交代で家庭の味を生かしたご飯づくり

る。高島平団地が出来て40年以上たち、高齢化率（65歳以上の占める比率）が40%を上回るほど人口構成が一変。若者向けの店舗運営が難しくなるとともにそこへ高齢者を中心顧客層するコミュニティーカフェに入れ代わるのは当然の流れである。

その4ヶ所だが、まず最初に、開設して丸2年目になる「コミュニティーカフェ・高島平駅前」について主宰者の村奈嘉義雄さんが説明にあたつた。

村奈嘉さんは、高島平団地開設時に地域新聞「高島平新聞」を創刊し、40年の変遷をずっと見守ってきた団地の生き地引のような人である。主宰するカフェは「様々な活動を日替わり、時間替わりで次々増やしていく」と言う。喫茶店をはじめ、訪問マッサージ、終活コンシェルジエの「無料なんでも相談」、英会話教室、民謡教室、韓国料理教室などを催すほか、看護師を目標す中国人留学生との交流の場でもある。

次いで「地域リビングPLUS ONE(高島平)」から、中川有希子さんが「高齢者と放課後の子どもたちの居場所です。地域のボランティアさんが交代で家庭の味を生かしたご飯づくり

コミュニティカフェとは

地域住民に役立つ
出会いの場。

- ふらっと立ち寄る、地域の茶の間、まちの居場所、まちの縁側、サロン
- 草の根の市民活動、単なるサービス業ではなくNPO精神
- 空き家、空店舗、古民家、自宅の一部、新築など多様
- 1990年代後半から各地で広がる。全国で約1500
- 毎日～月1回など開催日はいろいろ

WAC(長寿社会文化協会)が「コミュニティカフェを作ろう」を出版⇒「コミュニティカフェ」と命名

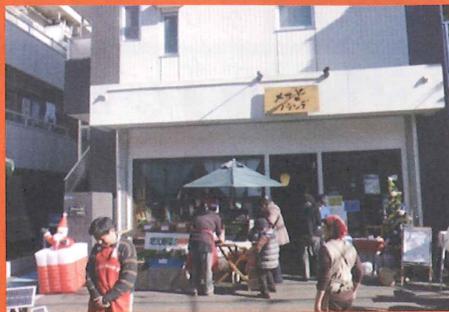
WACの活動

- 2008年から「コミュニティカフェ研究会」を始める。35回開催
- カフェの開設者から体験談や目的を聞き、Q&Aも
- 全国交流会をほぼ毎年開催

各地のコミュニティカフェ



名古屋市の「まちの縁側GOGO!」
わらいヨガ講座



「NPO法人ぐらすかわさき」運営、川崎市の
「メサグランデ」



町屋を改装した金沢市の「どんぐりの木」



「NPO法人ぐらすかわさき」が手がける「コミュニティ
カフェ開設講座」。「メサグランデ」で現場研修。

をしています。その『ご飯当番』さんは18人いて、月に20日ほど活動しています」と説明にあたった。

「未来箱」からは角竹美好子さんが、そして東新町の「たまりば・とうしん」から石黒正吉さん、光が丘の「団地の縁側」から古市盛久さんがそれぞれ開設の経緯から現在に利用者、活度内容などについて披露した。

最後に登壇したのは、自宅で「コミュニティスペース」あゆちゃんちを始めた坂川智恵さん。娘で重症心身障害者の亞由未さんの乗る車椅子を操りながら現れた。

亞由未さんが不自由な心身にも関わらず、特殊な器具を通じて来場者に挨拶すると一斉に拍手が起きた。母親の智恵さんが重度の障害者と地域の交流に熱心に取り組んできた歩みを語り出した。

「あゆちゃんち」では亞由未さんを中心に、高齢者や障害者、ボランティアの若者などが毎月1回日曜日に集まり、みんなで作つて食べる「一緒にご飯」を開いたり、「アメリカ人先生の英語教室」を開催している。月曜日には「日本人先生の英語サークル」、そのほか「親子リトミック」「パソコン・タブレット教室」「パンドライブ」「アロママッサージ」

「手作りカフェ」なども随時開いているという。

各団体の紹介を終えた14時40分からは、「コミュニティスペー

ス運営者座談会」を開いた。村

奈嘉さんが進行役となつて、古市さん、中川さん、坂川さんの3人が運営内容について突つ込んだ議論を展開した。

ほとんどの団体が常設であるところから、運営費の調達方法やスタッフの確保に頭を悩ませており、どのようにして解決法を見出しているかが一つの焦点になつた。

ボランティアが認知症ケアの担い手になる?!

そして、14時50分からは第2部として「高齢者の居場所作りを考える——認知症ケアを視野に」をテーマに、国の政策を絡めてより広い視野からのパネルディスカッションに入った。

ファシリテーターとして長寿社会文化協会常務理事でジャー

最も軽度の要支援者向けの訪問介護と通所介護（デイサービス）

が国の一連運営から区市町村の個別運営に切り替わり、その新たなサービス提供者としてコミュニティイカフェや地域のボランティアが重要な役割を認められていること。さらに、認知症ケアの支援者としても同様の社会的活動を求められていると話した。

こうした国的新しい取り組みについて、厚労省の翁川さんが認知症ケア5か年計画（オレンジプラン）を取りあげて説明した。同プランの中の7つの目標の一つとして「地域での日常生活・家族の支援の強化」が挙げられ、その具体策に「認知症の人とそ

より保健福祉センター所長の永野護さん。それにカフェの実践者としてNPO法人ドリームタウン代表理事の井上温子さん、NPO法人健やかネットワーク理事の佐々木令三さんが参加した。

井上さんは「たまりば・とうしん」のそれぞれ運営者である。

まず、浅川さんがコミュニティカフェが介護保険の改定によつて、国から表舞台での活動を要請されている事情を解説して口火を切つた。

